

# 中華若木詩抄にみる中世末「漢字理解」の一傾向

古田雅憲

## 一 はじめに

いったい抄物という資料が注釈を第一義的な眼目として持つものであるならば、その対象として取り上げられた原典中の字句について、すべて事細かに和らげが付されなければなるまいが、むろん関わった人々は、僧侶にしても博士にしてもまったくの初学者などではないわけで、一句一字のすみずみまでそのような作業が施されるとは、経済的にも常識的にもあり得ぬ事。それこそ彼らの「常識」にしたがって、必要な注が必要な箇所が付されるのがあたりまえというものであろう。

そのような立場で原典と抄文の対応関係を整理してみれば、彼らが原典の何処をどの様に「処理」したかが見えて

来よう。そのような「処理」の仕方のあれこれに、抄物作者たちが原漢文のどこを「難解」そのままでは馴染みにくいもの」と思い、どこを「容易」そのままで充分に馴染むもの」と感じたかという、彼らにとつての漢文／漢語／漢字の「馴染みやすさの程度」といったものが反映しているとすれば面白い。すなわち本稿は中世末の「漢字理解」とでもいうべき問題の一端について、中華若木詩抄をテキストとして、漢字の原典漢詩における出現頻度と注釈態度の関わりからその漢字の「難易」Ⅱ「通用の程度」を観察しようとするものである。

中華若木詩抄のあれこれについてはもはや言うまでもないこと、ここでは古活字一八行版（『語学資料』としての中華若木詩抄（校本））亀井孝氏 清文堂（一九七七）を用いて、

原典漢詩中に用いられる漢字の一事が、漢詩注釈の作業に際してどの様に「処理」されているか、原典漢字とそれに対応する抄文の表現との比較対照を行った。(二字以上の「漢語」についての調べは別稿にて述べた。)

またこのような「漢字」のことを論じて行くときに避けられぬ様々の問題、たとえば異体字の処理一つにしてからが大きな課題を含むものであることは諸家のつとにご指摘のあるところであるが、作業の都合から、特に問題のある場合を除いては、今日通用の字体を用いて示している。

## 二 注釈の「型」ということ

全編を通じ二六一句の七言絶句とその各詩題に用いられる漢字、そこから「固有」名称等を除いたおよそ七七〇〇弱(のべ)の漢字について作業を行っていくなかで、原典漢詩の漢字に対して採られる「処理」の仕方には次のような三種の別があることが知れた。

(a) 原典の漢字が対応する抄文の表現中にそのまま使われる場合

(そのなかには音読の形で現れるものもあれば、送り仮名とともに訓読みの形で現れるものもある)

(b) 原典のままには使わない場合

(別表現に代えられるものもあれば、仮名で訓読み

されるものもある)

(b) 原典の漢字に対応する抄文側の表現が見いだせない場合

これらの違いについては、例えば「依旧青山緑樹多」(二五六/四) 数字は亀井氏校本中に付される漢詩番号二五六番の漢詩第四句を意味する。/〇があればそれは詩題を示す。以下同様) について、

「山毛川モ大事モナクシテ青山ハモトノ如ク青々トシテ緑樹ライシケリテアルソ」

という抄文が付されるわけであるが、そのうち〈青〉〈山〉〈緑〉〈樹〉を(a)、「依」〈旧〉〈多〉は、それぞれヘモトノ如クヘモトノ如クヘライシケリテアルに言い替えられたものとみて、それらの漢字を(b)として認定しようというのである。

また「黄金莫惜買青春」(七九/二) について、

「買ルルナラハ黄金ヲ惜マスシテ春ヲ買テアソフヘシ買青春ヲト云ハソコニ妓女ヲ買ト云心アリ」

という抄文を見るが、原典漢詩中の〈青〉字の意味するところは抄文中の表現にはつきりとは見ることができず(む

ろん文脈上のニュアンスには込められているはずであろうが、このように表面的に触れられなかったに見える字について、とりあえず「b」と区別して「b」と認定しておこうというのである。

### 三 漢字と注釈の「型」との関わり

このような手順にしたがって、原典漢詩中の各漢字と対応する抄文表現中での取り扱われ方について「a/b/b」の分類を施していった訳であるが、結果、次のような傾向を持つ漢字が見いだされることがわかった。（ただし原典でのべ使用五回以上の漢字のみを対象として。）

- I 《いつも（多くの場合）「a」である漢字》群
- II 《いつも（多くの場合）「b」である漢字》群
- III 《いつも（多くの場合）「b」である漢字》群
- IV 《「a/b/b」が混在する漢字》群

#### 三―I 《いつも（多くの場合）「a」である漢字》群<sup>(1)</sup>

以下に示すような漢字群は、多くの場合和らげを与えられることなく抄文中に取り込まれるものである。（その一々について原典漢詩と抄文を対照して一覧するべきであるが、紙幅の都合でそれも叶わない。とりあえず所属の漢字群を部首順・画数順にしたがって列記しておく。また「」を付したものは

《多くの場合にaであるが、必ずしも決定的ではない》という漢字である。以下の項同様）

下丈世・中・「主」・高・人今催僧・兵・寒・丹・出・  
「前」「別」・力功・雁雙古「台」名吹吟問喚園・寺地坐堂  
掃・夕外夜夢・大天夫・家客宿・尋・小・尺居屋・山・  
布年・床「底」・行徑「後」待・心忘「思」「恩」恨惜愁・我・  
扇・院「隔」陽・「新」・日昏明春映晚景晴晚暮・月「朝」・  
木村林「枝」松枯柳桜桃梅梨棠楊樓樹欄・歌・「帰」・残・  
水水池沙「河」「波」海酒流溪深湖漲瀑灯烟燕・「王」玉・  
社神・花若草苔葉「落」万蓑葉・画・瘦・白・唾・短・  
破和秋・窓・章・竹竿笑笛簾籬・「紅」紫緑・者・耳声  
聞・「書」・興・舟・「色」・貴・路・「辺」近逢遅遠・醉・  
里野・舞・金釣鏡・長・門・離・雨雪雲霜露・蝶・衣  
「初」衰・詩読・顔・風・「飛」・馬驚・髮鬢・魚・鳥鶯  
鷗・塵・「黄」

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千  
西 東 南 「北」

#### 三―II I群の漢字の性格

さてI 《いつも（多くの場合）「a」である漢字》群とはどのような漢字群であるか。抄物という資料が先に触れたようなことであるならば、これらの漢字どもがもはや注

を要求しない性格の、いふなれば日常よく見慣れた使い慣れたもの、日本語の表現としてそのまま馴染みやすいものであったということが言えるであろうか。なるほど、それらのなかにはへ一二三四五六七八九十百千ゝあるいはへ東西南北ゝといった、見慣れた、使い慣れたものと想像するに難くない漢字が含まれ、それらの一つとして《Ⅱ》群の方にはないのである。

ここで原漢詩中での使用回数と、その漢字が和らげを受ける事が多いかどうか（a/b）の別Ⅱ馴染みやすさの程度との関わりについて数字をまとめてみた。（左表一参照）

表一

延べ字数による（パーセンテージ）

| 計             | b'           | b             | a             |       |
|---------------|--------------|---------------|---------------|-------|
| 641<br>(100)  | 55<br>( 9)   | 344<br>( 54)  | 248<br>( 38)  | 1回    |
| 1945<br>(100) | 154<br>( 8)  | 891<br>( 46)  | 900<br>( 46)  | 1～4回  |
| 3151<br>(100) | 405<br>( 13) | 1000<br>( 32) | 1746<br>( 55) | 5～19回 |
| 2578<br>(100) | 319<br>( 12) | 716<br>( 28)  | 1543<br>( 60) | 20回以上 |
| 7674<br>(100) | 878<br>( 11) | 2607<br>( 34) | 4189<br>( 55) | 合計    |

抄物が注釈書であるという一点にこだわるならば、全体で七六〇〇強の原典漢詩中の漢字（延べ数）が、その半数強の場合について言い替えを与えられずにそのままの姿で（送り仮名をとまなう訓読みに代えられたもの含む）抄文中に取り込まれているという実状に少し意外な気がしないでもないが、むしろ抄物に関わった人々は、僧侶にしても博士にしてもまったくの初学者などではないわけで、一句一字のすみずみまでそのような作業が施されるとは、経済的にも常識的にもあり得ぬ事、それこそ彼らの「常識」にしたがって、必要な注が必要な箇所が付されるのがあたりまえというものであろう。

全体的にはそうにしても、原典漢詩中での使用回数別（テキスト中によく見るか否か）の観点で少しばかり分析してみれば事情はだいぶ異なっているらしい。

原典漢詩中にそれぞれ一回ずつしか出てこなかった漢字が、そのままの姿で抄文中に取り込まれることはむしろ少数であって、その半数以上の場合には別の表現に言い替えられたり、あるいは仮名書きに代えられたということである。抄物の注釈書たる由縁というべきか。

これに対して、二十回以上の使用頻度を持つ漢字群は延べ合計二五七八回にわたって漢詩中に用いられたが、その六割の場合についてはその漢字がそのまま使われ（送り仮名とともに訓読みされるものも含めて）、言い替えられる場

合の方が、今度は少数となるといったことが窺われるようである。

これには付け加えて置くべき事があり、それは使用回数が多い（五回以上使用）漢字群のうちには、例えば「非到不与須耶也未」「得」「莫可」「只」「如」「唯」「欲独猶忽被還」「当」「有在為」「此」「亦」「能」「是」「便之無更曾却於教」「又」「応着」など漢文の構造に特徴的な、日本語の文構造には馴染みにくい様なものがあつて、当然のことながら、これらの漢字群はいつも（多くの場合）に言い替えを要求している。||ほとんど「b」に数えられているわけで、それらの数字を割り引いて考えれば、使用回数と和らげを受けるか否かと云うことの関係は一層明瞭なものとなつて来るだろう。これらの数字を見る限りにおいて、やはり、原漢詩中に使われる回数の多い、言い替えればテキストによく出て来る見慣れた漢字ほどそのまま抄文中に取り込まれて使われるらしいことが窺われる。

原典漢詩中のある漢字が注釈に際して「a」の対処を受けることと、その漢字が抄物作者にとっては見慣れた、日本語の表現として用いるのによく馴染んだものであるということとは関係があるといつて良からう。

ここから先に示したI《いつも（多くの場合）「a」である漢字》群の漢字は抄物作者にとっては見慣れた、日本語の表現として用いるのによく馴染んだ漢字たちであつたと

いつてよいであろう。（厳密には底本は古活字版であるから直接に「作者」その人とはいいいにくく対校作業が求められるが、大略に問題はなさそうである。）

ついでに、機能的なことからみれば、対応する抄文側の表現で名詞（体言）的に使われることの多い漢字が、これら《I》群の漢字の中に比較的多く含まれていることなどは指摘されるべき事柄かも知れない。

たとえば、名詞的に用いられる字の多い「きへん」「くさかんむり」「たけかんむり」「さんずい」などの漢字と、対応する抄文側の表現中に動詞（用言）的に用いられる字の多い「ごんべん」「くちへん」「りっしんべん」「おつによ」「かんによ」「きによ」「しんによ」「すいによ」「そうによ」「ぼくによ」などについて、「a」「b」の別を調べてみたのが次の数字である。（次項表二参照）ちなみに全漢字を通じての比率が「a/b/b」||（55/34/11）であるが、そのようなことも踏まえながらこれらの数字を眺めれば、やはり名詞（体言）的な用法の漢字は動詞的（用言的）な用法の漢字に比べて「a」である場合が多いようにもみえる。

もっとも、漢字の構成（篇旁）は意味論的な語彙体系を反映するものとも言えるわけで、そうすればこのような分類と傾向の抽出は意味的な観点からの分析をこそ必要としているかも知れぬ。

表二

延べ字数による（パーセンテージ）

| 計            | b'          | b            | a            |             |
|--------------|-------------|--------------|--------------|-------------|
| 349<br>(100) | 37<br>( 11) | 87<br>( 25)  | 225<br>( 65) | キヘン         |
| 347<br>(100) | 24<br>( 7)  | 70<br>( 20)  | 253<br>( 73) | クサカ<br>ンムリ  |
| 95<br>(100)  | 4<br>( 4)   | 14<br>( 15)  | 77<br>( 81)  | タケカ<br>ンムリ  |
| 344<br>(100) | 38<br>( 11) | 86<br>( 25)  | 220<br>( 64) | イサンズ        |
| 130<br>(100) | 15<br>( 12) | 64<br>( 49)  | 51<br>( 39)  | ンゴンベ        |
| 314<br>(100) | 54<br>( 17) | 120<br>( 38) | 140<br>( 45) | ンクチヘ        |
| 203<br>(100) | 16<br>( 8)  | 100<br>( 49) | 87<br>(43)   | ンリッシ<br>ンヘン |
| 259<br>(100) | 29<br>( 11) | 117<br>( 45) | 113<br>(044) | ニニョウ<br>(計) |

三—三 II 《いつも（多くの場合）（b）である漢字》群

以下に示すような漢字群は、多くの場合、対応する抄文中には別表現に言い替えられたり、仮名で訓読みされるなどして、先のI群の漢字と違って、原典の漢字のままには使われないものたちである。

不・之・也・「亦」・化依作似便倚・先・公・冷・到・  
却・「又」・「口」可「只」后「向」如「唯」・在・奇・好・  
孤・寄・对・已・帶・応度・「得」微・独猶・耶郎・陰・

忽恐情意懶・成・教・於・易「是」暗・更曾・有・未  
「相」欲・「此」・淡湿漫濃・焼然無・為・苦莫薄・留・  
「当」・疑・看着・碧・被裡索経・「聴」・「能」・自・与・  
解・覚・言「試」語説誰識・負・起・道還・難非・「面」・  
須

これらの漢字のうちには、例えば「非到不与須耶也未」「得」莫可「只」如「唯」欲独猶忽被還「当」有在為「此」「亦」「能」「是」便之無更曾却於教「又」応着など漢文の構造に特徴的な、日本語の文構造には馴染みにくい様なものがあつて、これらの漢字どもがいつも（多くの場合）に言い替えを要求している。その漢字そのままでは抄文中に現れにくいことは、ある意味では当然のことであるだろう。このほかに「且至縦宜所從而奈个以了豈雖」なども、使用回数が四回以下であつたので上表には載せなかったが、同様のものである。

そのような構造的な問題のあるものを除いた漢字は次のようである。

化依依作倚・先・公・冷・「口」后「向」・奇・好・孤・  
寄・对・已・帶・度微・郎・陰・恐情意懶・成・易暗・  
「相」・「此」・淡湿漫濃・焼然・為苦薄・留・疑・看着・  
碧・裡・索経・「聴」・解・覚・言「試」語説誰識・負・起・

道還・難・「面」

三―四 II群の漢字の性格

これらの《II》群の漢字について抄物作者は、それが出て来る度に繰り返し言い替えを与え、あるいは仮名書きで訓読するなどして説明を尽くしているのである。これら原典漢詩中の漢字をそのままに用いた注では注たる抄文として「馴染まない」といったような印象があつたということか。もつとも、ことはどうやらそんなに単純なことではないらしく、たとえば《II》群中の漢字《言／説／道》字と《云》字との間に次のような関係が窺われる。

《言》

却言花是去年開（〇七五／四）

却テ遊人ノ早キト云テ  
ワメクヲ不審スル也：  
アノ花ハ去年ヨリ開キ  
テソウ者ヲト云ソ

多言謾聒他人耳（一二四／一）

世語ニモ言多者ハ科少  
ト云ヤウニモノヲ多ク  
云ヘハ人ノ耳ニカシマ  
シウテワルイソ

莫言馬上得天下（〇四五／三）

馬上二三尺ノ劍ヲ提テ  
天下ヲトルト云タ事ソ

莫言隱者無功業（一二〇／三）

サリナカラソレハ高祖  
ハ云ワレマイ  
隱者ハ何ノ事業モナク  
安閑無事ニシテ居ルト  
云ヘトモ又事業アル事  
アリ  
この他には明確な対応抄文の見られぬものが二例ある。  
（〇三六／一、〇七四／一）

《道》

却道溪辺似画図（二八〇／四）

画カ溪山ニ似タト云ワ  
ンスル事ナルソ：アマ  
リ云ワンズルトテ本意  
ヲ失却スル事アルソ  
ナニト語ソナレハヨク  
ヨク此楓ヲ御覧セヨ春  
二三月ノコロ百花ノサ  
キ乱ルル中ニモカヤウ  
ナ花ハアルマイソ

似道花時無此花（〇四六／四）

人道老狂作兒戲（二〇五／三）

我ハ随分トラモヘトモ  
人カ云事ハマツハラサ  
ナカマシキ事ヲセラル  
ル老テ再ヒチコトナル

莫道君王能擊劍（一九五／三）

云ハカヤウノ事ニテモ  
アラウスル

莫道書生無用処（〇九九／三）

項羽ハサヤウニ劍ノ上  
手ト云ヘトモ用ニモタ  
タヌ事ソ  
書生ニ學問ハ入ラヌ事  
ヨトハ云ヘカラス

莫道文章不直錢（〇三五／二）

世間ニ人カ文章ハ一錢  
ニモアタラヌト云カス  
チトモナキ事也

この他に「臨川道中（〇七三／〇）」で「みち」義として  
使われる一例があり、ちなみにそれは、対応抄文中でも  
「道」字のままに使われている。

〈説〉

休説劉家李広孫（〇四三／四）

李広カ子孫ノ李陵チャ  
ト云ヘカラス

失口何人説紀生（〇二一／四）

紀生カ如クナル天下ニ  
比類ナキ者ヲハトリハ  
ツイテモ云イ出サヌ也  
我カソナタヲ思フココ  
ロヲ云トホトイテ髪ニ

説情比髪髪都短（一二七／三）

莊周所説不荒唐（〇七六／四）

クラフレハ：事外短キ  
事也

対人猶自説帰耕（二二八／四）

莊子ニ有力者カ山ヲ負  
テ去タト云事アリ  
人ニ逢テハ世上ノ事モ  
六ヶ敷ホトニ隠居シテ  
田ヲ耕シテ樂ムヘキト  
云ソ

聞説春波学字流（〇八二／四）

ムカシヨリ人ノ云事ハ  
巴江ハ学字ヲ流ルルト  
云ソ

猶指金創説戦時（〇六七／四）

フル創トモヲ指シテ此  
創ヲ蒙タトキハ何トハ  
タラキタナントト云テ  
イクサ雜談ヲスルマテ  
也

郎説黄金妾不応（〇四七／二）

黄金ヲ取出シテコノ金  
ヲ婦人ニマイラセタイ  
ト云ヘトモ黄金ヲモイ  
ヤト云ソ

この他に対応抄文中に別表現で注されるものが四例  
惹得詩人説到今（一九四／四） 世上ノ詩人カ今世マテ



モ梅ト云へハ詩ニ作クル

生来不説世興亡（二〇七／二）

生レテヨリコノカタ世上ノ興亡ト云事ハ齒ヨリ外ヘ出サヌ也

相逢桑下説黄金（二二四／一）

別レシ妾ニ桑下ニテ逢タソ：黄金ヲヤリテ桑下ニテ会合シテ夫婦トナラン事ヲ約スルソ

有書無字如何説（二三五／三）

書ハ書ナレトモ：字モナケレハ誰ニモ呈シ得ヌ也

また、〈説〉字がそのまま用いられる場合が一例有るようである。

題詩説与老夫意（〇七二／三）

詩ヲ一首作テ吾カ意ヲ主人ニ説テキカスルソ

〈云〉

誰云嶺外無霜雪（二〇八／三）

嶺南ハ南方ノハテ也其辺ニハ冬ナレトモ霜モ雪モナキト云カ我カ頭上ヲ見ヨ

すなわち原典漢詩中に「ものをいう」義について用いられる〈言・道・説〉字は、その対応抄文中にはほとんどの場合〈云〉字に言い替えられているのである。それにしても、ここから〈言・道・説〉字が和らげの表現としては「難解＝馴染まない」用字、あるいは〈云〉字こそ通用の漢字であるという具合に認識されていたとはいにくいようである。ここはやはり個別の事情を考えていった方がいいようである。

〈知／識〉字の関係についても同様の事柄が窺われるのかもしれない。<sup>2)</sup>

三―五 III 〈対応抄文のない（b）〉である場合が多い漢字群

以下に示すような漢字群は、多くの場合、その原典漢字の意味的に対応する抄文そのものが見いだせないようなものである。

正・偶使・凶・題

三―六 IV 〈（a／b／b'）が混在する漢字〉群

以下に示すような漢字群は、原典漢詩に現れる度に対処の仕方が異なる、すなわちある場合には原典漢字の儘に抄文に取り込まれたり、別の場合には和らげられたり、注を

つけるに際して一定の意識の窺われぬようなものたちである。

上生・久・事・来余何佳信倦・光・入函・処・分・半  
・卷・去・同回君吾知・城・多・始・子・空宮寂・少  
・師・平・幽・狂・都・故散数・斜・断早時・青望・  
本様機・歳・「清」涼満・点・争・英荷・用・疎・病・  
尽・眠眼・破・香移種・立・答・終・老・臥・見・足・  
身・送通連過随遊・開間閑閑・旧・頭

これら《Ⅲ・Ⅳ》群の漢字についてここまでのような「難易」の観点から説明を付すことは困難であるが、いくつかの興味深い事情は散見するようである。

たとえば「足」字について、この漢字は全漢詩を通して七回使われるもの(五／二、一八／〇、一八／四、三五／三、一六一／〇、一六一／三、二四四／二)であるが、「へあし」の意味で用いられる場合には抄文中にそのまま「足」字が使われるのであるが、「充足する」の意味で使われる場合には、二例(五／二、三五／三)とも「足」字ではなく、「眼底英雄不足図」(五／二)に対して「中々ハカルニタラヌ事也」、「好詩未足三千首」(三五／三)に対して「イマタ三千首ニタラヌホトニ」と注されるとおり「タル」と仮名書きされているのである。このような意味によるのではないかと思われる書きわけなどが見いだされたりもする。

る。

「荷」字についても同様の指摘ができるようで、「荷花」としてはそのまま使われる(四八／四、八一／〇、八九／二、八九／四)が、「へになう」の意味では「莫笑衰翁日荷鋤」について「衰翁カ毎日鋤ヲニナウテ菜園ヲ」のように注されている(二七／四)。

また「口」字についても、「へくち」の意についてはそのまま使われる(一／四、一〇〇／二)が、例えば「水口舟中」に対して「水口ハ水辺也」(二五六／〇)、「渡口喚舩人独立」に対して「ココハ舟ニテ渡ル処ナレハ」(二〇二／三)、「白雲谷口碧溪灣」に対して「白雲ノアル谷ニ立テ」(二五二／二)などのように注されているのを見るにつけ、やはり意味による使い分けのような事があるように思われる。

類似のことがらが「へ生」「へ上」「へ終」「へ寂」「へ尽」などについても指摘できるようであるが、いづれにせよ様々な観点からの分析が必要であって、今はこれ以上の事柄を語るべき言葉を持ち合わせていない。

以上のように中華若木詩抄をテキストとして中世末の「漢字理解」とでもいうべき問題の一端を語ろうとしたが、本稿が取り上げた出現頻度と注釈態度の関わりから漢字としての「難易」Ⅱ「通用の程度」を観察しようといった観

点からだけでは論じられぬ事柄が余りに多い。大方のご批正をお願いする次第である。

注(1)ここに云う「いつも」とは一〇〇%を意味しない。例えば〈窓〉字、全漢詩を通じて一〇回現れる(四/三、三八/二八〇/二、八三/一、九三/四、一〇二/三、一)が、そのうち一回二〇六/三が〈b〉と判断される。他は〈a〉である。同様に〈雨〉字、五九回現れるが、そのうち〈a〉と判断されるのは五六回である。そのようにほぼ一〇〇%といっても良いものから、例えば〈下〉字、二二回中/〈a〉一六回、また〈行〉字、一八回中/〈a〉一三回といったような七〇%程度のものまでを含む。

また〈紅〉字、三四回中/〈a〉二三回、あるいは〈後〉字、二一回中/〈a〉一回といった、おおかた七〇%に達しないものに「」印を付しているということがある。

(2)〈識〉字、全漢詩を通じて九回現れる(一六/三、三九/三、八二/〇、一〇一/三、一九四/三、二〇八/三、二二四/三、二三五/二、二五四/四)が、うち七回は別表現に替えられ、そのうちの五回(一六/三、八二/〇、二〇八/三、二二四/三、二五四/四)が〈知〉字を使った表現に替えられているのである。

一方〈知〉字は二六回中/〈a〉一三回というようなもので、こちらが〈識〉字を用いた表現に和らげられる

ことはない。とはいふものの、一〇回は別表現に替えられており、これも単純に〈識〉字よりも〈知〉の方が云々といった議論にはならぬであろう。ちなみに〈知〉字は原典漢詩中に〈不知/未知/知否/誰知〉といった否定あるいは反語表現として多く用いられ(二六回)ていて「型」を思わせるが、そのことと注釈の付け方との間に関連性は見出しにくい。

\* 特に必要にない限りにおいてそのいちいちを揚げなかったが、『中世の漢字と言葉』(「漢字講座六卷」明治書院 一九八八)あるいは『漢字と仮名』(同四卷)、及びそこに揚げられる諸文献を参照させて戴いた。